ひとくち法話

宝林宝樹（ほうりんほうじゅ）（5）

ある夏の暑い日のこと、お米作りをしているご門徒さんの家にお参りに行きますとそこのおじいさんが汗を滝のように流しながら帰ってこられました。私が「暑いのに大変ですね」と声をかけますと「院主さんな、わし、あと何回米作れると思うか」と尋ねられたのです。突然の問いに戸惑いながらも「まだ十年は大丈夫でしょう」と答えると、「そうやなぁ。わしの年を考えたらあと十年できたらええ方やろう。ということは多くてもあと十回しか米を作ることができんということやろ。そう考えたらな、苦じゃないんで。むしろ愛おしいんで」と仰いました。

私たちは人生の終わり、死というものをあまり考えたがりません。「死ぬことを考えたらバカらしくて生きていけない」という人もいます。しかしそうではなかったのです。このおじいさんは死ぬことを真正面から受け止められ、暑い日の農作業であっても「愛おしい」と喜びを口にされました。これが最後になるかもしれないと知った者は苦しみの中でも喜びを見出すことができるのです。暑い暑いと愚痴ばかりの私は恥ずかしくなると同時に、ありがたいことを教えていただいたと手を合わせたのでした。